

# イタリアにおけるアルバニア集落とアルバニア系イタリア人(II) カラブリア州北部における事例

竹 内 啓 一\*

## Albanian Settlements and the Italo-Albanian in Southern Italy (II): A Case Study in the Province of Cosenza

Keiichi TAKEUCHI\*

### 目 次

- |                          |                      |
|--------------------------|----------------------|
| I. はじめに                  | III. 社会経済的状況         |
| II. コセンツァ県におけるアルバニア集落の分布 | IV. 現代における arbëreshë |

### I. はじめに

本稿はすでに発表したシチリアのパレルモ県における事例報告(竹内, 1996)の続編をなすものである。はじめに, 序論として, 前稿と内容的に重複する部分もあるが, イタリアにおけるエスニックまたは文化的マイノリティとアルバニア系イタリア人と呼ばれるものについて概括的な展望を与えておくことにする。

前稿において, 文化的またはエスニックなマイノリティを, 1) 1960年代末以降, イタリアに流入した外国人労働者(当然のことながら, 大部分が EC 域外からである)(竹内, 1995), 2) イタリア国外に彼らがマジョリティになる領域または国家をもつが, 近代国家イタリアの領域に取り込まれることになった言語的マイノリティ, 3) 周囲の, 後にイタリア人と呼ばれることになる人たちとは異質の文化(言語や宗教)をもった人たちが, イタリアという国ができる前から別の集落をかたちづくっていたマイノリティの3つに分類したが, ここで取り上げる「アルバニア系イタリア人(italo-albanesi)は, この第3のカテゴリーに属することになる。イタリア北部および南部におけるエスニック・マイノリティを考察したベッリネッロ(Bellinello, 1991; 1996)は, この第2, 第3のカテゴリーに

---

\*駒澤大学文学部 ; Faculty of Letters, Komazawa University

ほぼ相当するものとして、エスニック・マイノリティを規定し、その集落を *allogene* と *alloglotte* に分け、前者は起源が明瞭で、その言語、宗教、慣習などを明瞭に保持しているのに対して、後者は起源した集団や領域との直接的結びつきや影響関係はなくなっているが、部分的にであれその文化を保持しているものと規定している。サルディーニアにおけるサルディーニア人集落を前者と規定するのは言語学的な理由によるものであろうが、これには賛成しかねる。しかし彼も私と同様、サルディーニアのカタラン人集落を後者に属するものと考えている（竹内、1996）。

前稿において指摘したように、イタリアにおけるアルバニア集落という場合には、歴史的にその起源が15世紀から18世紀の間における「アルバニア人」<sup>1)</sup>集落の創設あるいは再編成が起源したものと定義できるし、シチリアに関しては、憲章または永代小作権の承認によってそれを確定することができた。しかし、「アルバニア系イタリア人」とは何かという場合には、その理解にかなりの混乱が生じる。パレルモやローマのような大都会に住んでいても、ギリシャ・ビザンツ典礼のカトリック教徒である場合には、明らかにアルバニア系イタリア人であり続けているわけであるが、アルバニア集落でもラテン典礼のカトリック教徒でありながらアルバニア語を日常生活で用いる住民がいるし、彼らの多くはアルバニア語を喪失した場合にも、さらにはその子孫が大都会に住んでアルバニア語をまったく用いなくなっても、イタリア系アルバニア人または *arbëreshë* としてのアイデンティティを持ち続けている場合があるので、広義にはアルバニア集落の住民およびその末裔と規定するか、狭義にはアイデンティティの有無によるしか規定のしようがない。そして、前稿において結論的に指摘したように、現在のアルバニア集落の社会的および経済的状況はこの *arbëreshë* としてのアイデンティティの社会化の成否に大きくよっているのである。

## II. コセンツァ県におけるアルバニア集落の分布

前稿で指摘したように、1961年にフラシネートのジョルダノ神父によってあげられた95のアルバニア集落の中には、現在ではコムーネ当局によっても自らをアルバニア集落と認めていないものがいくつかあるが、これら95のアルバニア集落のうち、コセンツァ県に属するものが31、カタンザーロ県に属するものが18、レッジョ・ディ・カラブリア県に属するものが1つで<sup>2)</sup>、カラブリア州だけでアルバニア集落の過半数が占められていることになる。

本稿はカラブリアでもアルバニア集落が特に多いコセンツァ県すなわちカラブリア州北部についての調査にもとづくものであるが、まずコセンツァ県全体におけるアルバニ

ア集落の分布を、居住の展開の歴史的背景と、アルバニア集落の規定に関わる集落の社会的現実を考慮にいれて考察しておく。個々のアルバニア集落、あるいは集落群に関しては、すでに18世紀末のいくつかの旅行記に言及があるし<sup>3)</sup>、19世紀になると民俗や歴史についての研究もなされるようになったし、南イタリア全体について、アルバニア人の来住の歴史を検討した先駆的な業績も出版されるようになった<sup>4)</sup>。コセンツァ県におけるアルバニア集落とアルバニア系イタリア人の分布に関する本格的な研究として最初のものは地理学者マリネッリによるもの (Marinelli, 1913) で、彼は1901年および1911年センサスにおける市町村別の外国語人口データ<sup>5)</sup>をもとにアルバニア集落の同定と「アルバニア人」数の推定をおこなっているが、この場合、モングラッサーノ、チェルヴィカーティ、ロータ・グレカというその時点で住民がすでにアルバニア語を日常生活で用いなくなっていた集落はアルバニア集落とはみなされていない。その後のカンター(Kanter, 1930)、サヴォルニャン (Savorgnan, 1939) の研究では、言語よりも典礼が注目され、モングラッサーノも、チェルヴィカーティも、ロータ・グレカも、住民の大部分<sup>6)</sup>がギリシャ・ビザンツ典礼のカトリック教徒であるという点でアルバニア集落とみなされたのであった。

コセンツァ県に関しての第二次世界大戦後の研究では、ローターの仕事が、先行研究としてとくに重要である (Rother, 1966)。彼がコセンツァ県のアルバニア集落としてあげているのは、ジョルダナーノのものよりずっと少なくして19 (カタンザーロ県については8) であるが、アルバニア語の残存とギリシャ・ビザンツ典礼のいずれかに該当するものをアルバニア集落と規定し、1966年の調査時のアルバニア語人口などを推定し、それを1921年センサスのデータと比較し、Kanter (1930) を修正して図1のような分布図をつくっている。カンターがアルバニア集落と考えローターが考察から除外しているのは、当時はコセンツァ県に属していたセッラ・ダイエッコであり、ここでは現在の住民にアルバニア系イタリア人としてのアイデンティティーが希薄<sup>7)</sup>で、トゥーリング・クラブ・イタリアーノのガイドブック (Touring Club Italiano, 1980) にもアルバニア人起源であるとの言及は見られず、史料からもアルバニア起源は確認できないようである。ローターによる既往の研究の整理によるとアルバニア系イタリア人の人口が最大に達したのは1890年代で約9万9千人であり、1966年のそれは彼によつては9万2千人と推計されている。他方、ベッリネッロは、ローター参考にしつつも独自の推計から、1966年の全イタリアのアルバニア系イタリア人の総数を約11.0万、アルバニア語人口を約9.0万と推計し、ほぼ同じ方法による彼の推計によると、1988年におけるその数はそれぞれ10.4万、7.4万とされている。彼の推計によると、1988年におけるコセンツァ県のアルバニア系イタリア人の総数は約4.3万、このうちアルバニア語人口は約3.3万である (Bellinello, 1991)。

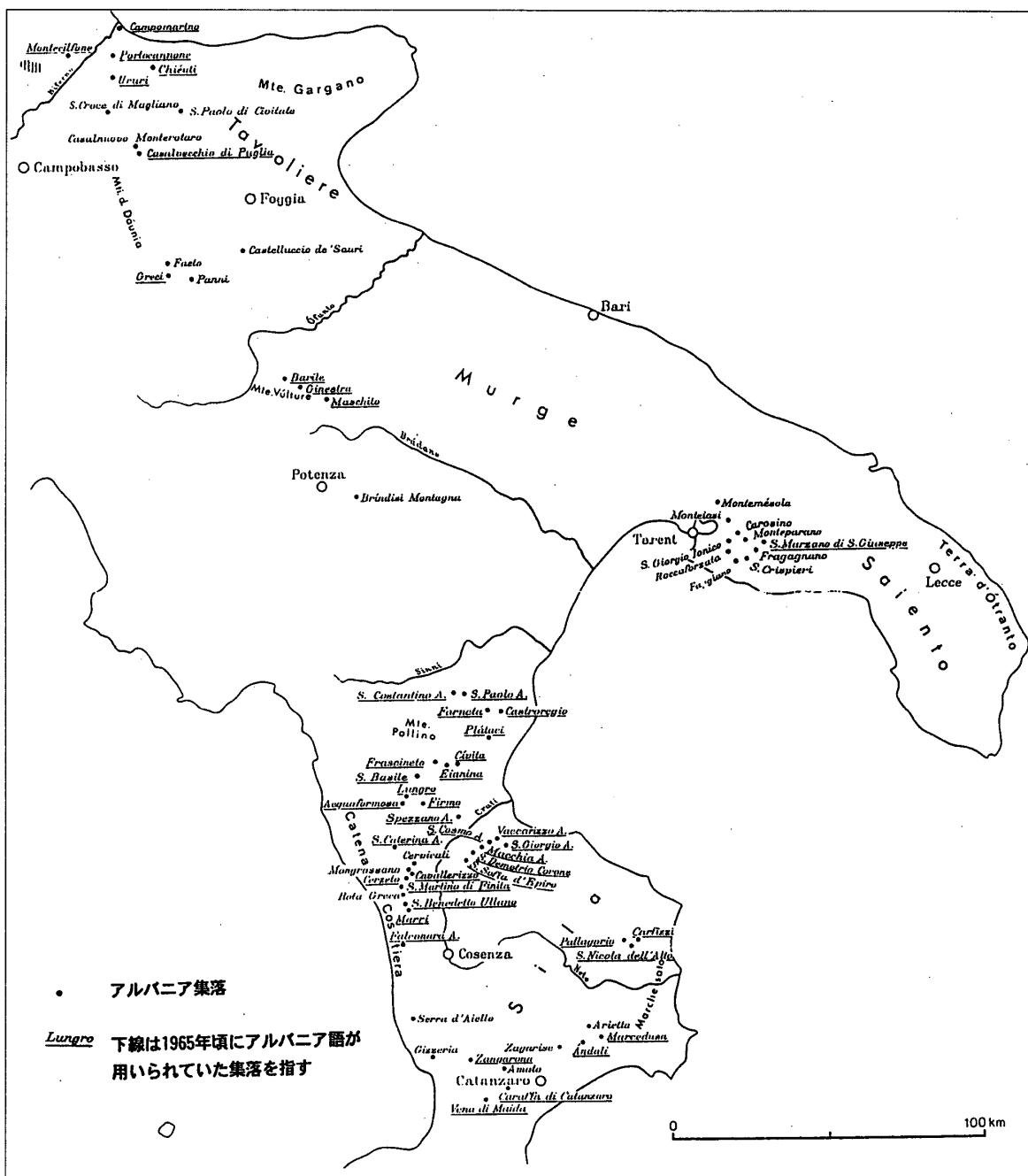


図1 南イタリア半島部におけるアルバニア集落 (Rother, 1966による)

図1に示されたコセンツァ県におけるアルバニア集落は、地理的位置からも、歴史的背景からの3つのグループに大別されることがわかる。第1のグループはクラティ川右岸のシラ・グレカ山地のもので、サン・デメトリオ・コロネをはじめとする5つのコムーネ、現在は行政的にはサン・デメトリオ・コロネの東部分をなしているマッキア・アルバナエーゼを独立した集落と考えれば6つの集落が深い谷によって隔てられながらほぼ東西方向に並んでいる(図3および図4参照)。カラブリアのアルバニア集落は、その大部

分がシチリアにおけるように憲章 (capitolo) あるいは永代小作権の承認 (concessione enfiteutica) の存在によってその起源を確定することはできないが、サン・デメトリオ・コロネについては1471年の憲章が確認されている (Pitto e Tocci, 1914)。これ以前にも、カラブリア北部に貧しいアルバニア人が流浪していて盗みなどをはたらいていたという記録もあり (Parise Martirano, 1992, p.11), 当時の史料では、14世紀から来住がはじまっていたジブシーとアルバニア人が混同されることもあった (Gambi, 1965; Bellinello, 1991, p.107)。イスケンデル・ベイの敗北(1466)とその死(1468)後、彼の娘 (Irene Kastriota) が近くの中心地ビジニャーノの領主 (Pierantonio Sanseverino) に嫁いでいたこともあって、1470年頃アルバニア人がこの山地に来住したのであり<sup>8)</sup> Corone の地名はペロポネソス半島の Koron に起源すると考えられている。

サン・デメトリオ・コロナは当初からアルバニア文化とくにギリシャ・ビザンツ典礼の中心地であったが、アクリ侯爵領に属していたサン・ジョルジョ、ヴァッカリッツォ、サン・コスモもサン・デメトリオ・コロナとほぼ同時期に創設されたことが16世紀から18世紀の後世の史料によってであるが確認されている (Tocci, 1865)。これらのクラティ川右岸のアルバニア集落はケルナーによる戦士起源、農民・難民起源の分類 (Kellner, 1972) にしたがえば、歴史的コンテキストからすれば、戦士起源と考えるれるが、カラブリアでは、シチリアにおけるように戦士起源であることが史料によって確認され、現在にいたるまで住民がそのことを誇りにしているようなアルバニア集落は存在しない。

第2のアルバニア人来住の波は、1479年にスクタリなどバルカン半島におけるアルバニア人の最後の防禦拠点がオスマントルコ勢力に占領されたのを契機にするもので、シチリアおよび南部半島部に多数のアルバニア人が来住した。シチリアの代表的な農民集落であるピアナ・デイ・アルバナージの憲章が与えられたのが1488年であるのをみても明らかのように、この時期に来住したアルバニア人の主体は農民であった。カラブリア北部でこの時期に定住して集落を創設したのはクラティ川左岸の丘陵地および山地で (図2参照)、ティレニア海にそった山脈とペツレグリーノ山地の東斜面に位置する一連のアルバニア集落の大部分はビジニャーノ侯爵領内に定住したアルバニア人によるものであり、ポッリーノ山地のものはシバリス平原の諸領主が創設したものであるが、史料によって設立の時期および来住アルバニア人がどこからやって来たかが確認されているものはない。ルングロ、チヴィタなどは、中世にそれぞれLungrium, Castrum Sancti Salvatoris として知られていた集落が存在していたところであり<sup>9)</sup>、このように既存の集落に多数のアルバニア人が来住した場合もあるが、プラータチ、カストロレジョなどのように、高度800mから900mをこす要害の地に建設された集落はアルバニア人の創設になるものと考えられる。

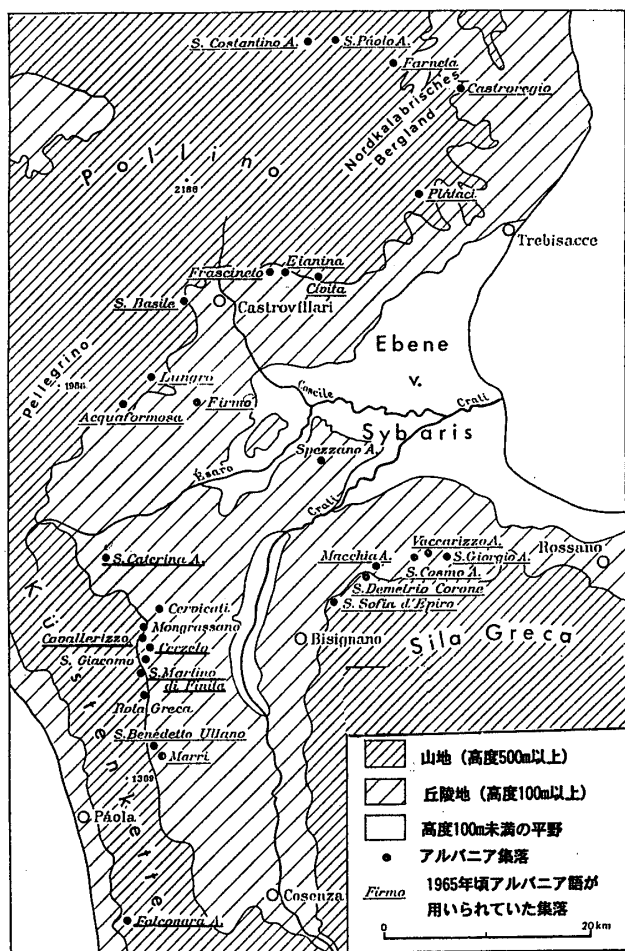


図2 カラブリア北部におけるアルバニア集落と地形条件 (Rother, 1966の原図を修正)

この第2のグループに属するアルバニア集落の過半数が、17世紀を通じてギリシャ・ビザンツ典礼からラテン典礼に移行した。このような事例はクラティ川右岸流域のアルバニア集落にはない。ここに第1のグループと第2のグループのアルバニア集落の性格の相違を見る意見もあるが (Parise Martrano, 1992), タヴォラーロは、このような典礼の変化を個別に検討して、それがむしろ派遣された巡察使 (inquisitore) の態度の相違によっていたことを示している (Tavolaro, 1963, pp.17-25)。18世紀にロドタ司教の尽力<sup>10)</sup>があつて、いくつかのアルバニア集落においてギリシャ・ビザンツ典礼が復活し、現在ラテン典礼だけなのはスペツァーノ・アルバネーゼ、サン・マルティーノ・フィニータなど6集落だけである。シチリアの場合と同様に、

カラブリアでもギリシャ・ビザンツ典礼のカトリック教徒であることは arbëreshë としてのアイデンティティーの根拠として重要であるが、ラテン典礼に従っていても arbëreshë アイデンティティーをもち続けている場合も多い。

第3のグループに属するアルバニア集落は成立がもっと遅く、16世紀以降のもので、バルカン半島からの直接の来住者のみでなく、アルバニア人の二次的な移住による場合もある。コセンツァ県では、確実にこれに属すると考えられているものはファルコナーラ・アルバネーゼ (図6参照) だけであるが、カタンザーロ県にはこれに属するものが多い。コセンツァ県でも、たしかな史料がないまま、いわば invented tradition として、アルバニア集落であるから当然先祖はスカデンベルグとともに戦い、栄光ある難民として15世紀に来住したと伝えられている集落にも、実際には16世紀以降に起源したものがある可能性がある。ファルコナーラ・アルバネーゼについては、アルバニアからの来住は15世紀末まで遡れるとしても、1670年の教会の教区台帳<sup>11)</sup>で、大部分の女性が近在とくにフィウメフレッ

ド出身の「イタリア人(lëtinj)」であったことから、17世紀になって二次的移動をふくめてかなりのアルバニア人男性が流入することによって、現在までアルバニア語を保持する集落の基礎がきずかれたことを推測させるものである(Altimari e De Rosa, 1995)。

### III. 社会経済的状況

15世紀以降のアルバニア人の来住が、未耕地あるいは耕作が放棄されていた土地になされたという歴史的事情(Beloch, 1937, S.222)は、図3からも知ることができる。コセンツァ県で高度がもっとも低い集落はスペッツァーノ・アルバネーゼ(海拔320m)で、現在は、灌漑施設の整備された豊かな耕地に囲まれ、近くには観光客の多い鉱泉もあって経済的に繁栄した地帯に位置しているが、15世紀にはビシニャーノ侯爵領の周縁部のマラリアの蔓延する湿地帯で、これを開拓するためにアルバニア人の植民がなされたのであった(De Leo, 1981)。シチリアでは、アルバニア人のいわゆる戦士集落が交通の要所に置かれたが、カラブリアではそのような事例はない<sup>12)</sup>。すべてが周縁的な立地であり、山の奥また奥にわけいって避難した場合もある。そして少数の例外をのぞいて、アルバニア集落においては19世紀以降、とくに第二次世界大戦後、人口の流出、耕作の放棄などの社会的、経済的周縁化、マージナリゼーションが顕著である。

具体的事情は集落によって異なるはずであるので、今回の日数の限られた現地調査にあたっては、歴史的背景、社会的、経済的および文化的問題という点で多様な10の集落を文献、統計データの検討から選び出し、あらかじめコムーネ当局に協力を依頼し、結局このうちの9つの集落と、現地において4つの集落を新たに選んで、コムーネ当局者、教区の神父、何人かの住民に対するインタビューを行い、資史料を収集した。一貫した調査方法、体系性を欠いた皮相ともいえる調査であった。13の調査集落について、まず人口の年齢別構成を表1にみると、いずれのコムーネにおいても、コセンツァ県全体の年齢構成に比して、若年および生産年齢層の比重が小さいことと、65才以上の高齢人口の比重が大きいことが注目され、第二次世界大戦後の急激な人口流出のあとは歴然である。とくにカストロレジオ、プラータチというイオニア海側の高地集落でこれが顕著であるが、カストロレジオの方が周縁化がいちじるしい。この二つの集落のあいだの差異は、プラータチの方がカストロレジオよりも100mも高く到達するのが大変であるから、地理的位置条件からは説明できない。プラータチでは、高地にあるということを利用して周辺のコムーネとともに山村組合<sup>13)</sup>を結成して、山村振興の助成金をえて、セカンド・ハウス建設や観光客の誘致につとめて生産年齢層を村に引きとめるのにある程度まで成功していることによっ

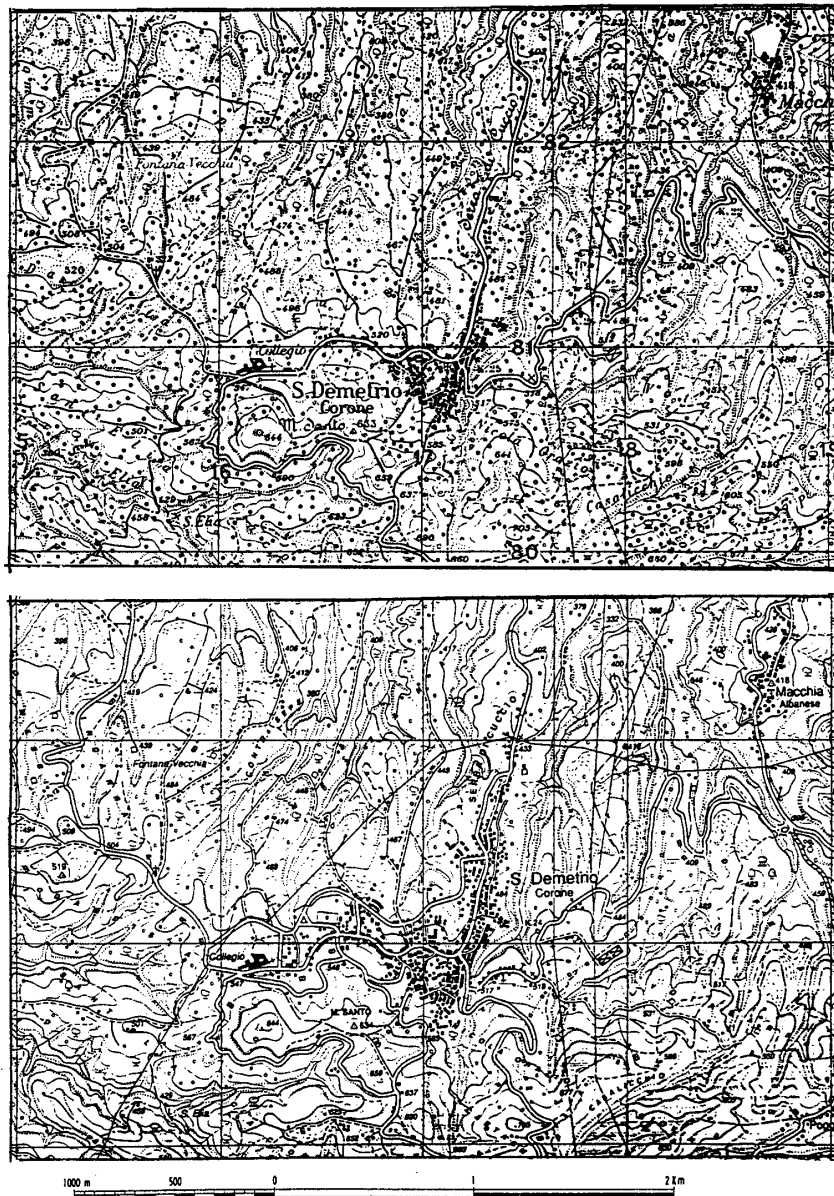


図3 サン・デメトリオ・コローネの変化 (1950年代中葉と1990年代初頭)

いずれも軍事地理研究所 (I. G. M.) の横メルカトル図法による2万5千分の1地形図からのものであるが、上の図は、1940年代後半の航空写真により作成し、1950年代後半に最終的な修正がなされた図幅である。下の図は、1980年代末から I. G. M. がまったく新しく作成を開始し、部分的にしか作成されていない新しい図幅で、この部分は1990年代初頭の航空写真によって作成された1993年版の図幅からのものである。いずれも多色刷りからの黒白コピーであるため、オリジナルな図幅の内容を十分には伝えることができないが、凡例、地名表記の方法などが、二つの図幅の間で大幅に異なるものの、住宅地の拡大、道路網の整備、土地利用の変化 (限られた耕地への樹木栽培の集中と機械化された小麦栽培の拡大)、散居の展開などを読み取ることができる。

ている。

若年および生産年齢層が少なく人口老齢化が進んでいるあと二つの集落は、サン・ベネデット・ウラーノとサン・デメトリオ・コローネであるが、この二つの集落は歴史的にはカラブリアにおける arbëreshë の中心をなしていたところで、サン・デメトリオはコセン



表1 年齢階層別人口（1991年10月人口センサスのISTATのデータによる）

|                       | 総人口     | 年齢階層 (%) |     |       |       |       |       |       |       |       |      |
|-----------------------|---------|----------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
|                       |         | <5       | 5-9 | 10-14 | 15-24 | 25-34 | 35-44 | 45-54 | 55-64 | 65-74 | 75≤  |
| Acquaformosa          | 1,460   | 6.0      | 5.9 | 5.7   | 13.2  | 14.2  | 12.7  | 10.6  | 14.8  | 9.9   | 6.9  |
| Castroregio           | 631     | 2.5      | 3.3 | 4.1   | 11.3  | 10.5  | 10.3  | 8.9   | 20.0  | 16.8  | 12.4 |
| Civita                | 1,291   | 4.0      | 4.5 | 3.9   | 13.1  | 12.5  | 11.1  | 10.4  | 15.9  | 15.2  | 6.0  |
| Falconara Albanese    | 1,434   | 6.2      | 6.9 | 6.1   | 16.0  | 17.0  | 13.5  | 7.8   | 12.5  | 7.2   | 6.8  |
| Lungro                | 3,256   | 5.4      | 5.2 | 7.3   | 13.7  | 14.3  | 14.3  | 10.9  | 12.2  | 9.7   | 7.0  |
| Plataci               | 1,437   | 4.0      | 4.5 | 4.3   | 13.0  | 11.9  | 15.3  | 11.5  | 13.5  | 15.2  | 9.4  |
| San Basile            | 1,807   | 6.0      | 6.4 | 8.2   | 17.9  | 15.1  | 12.3  | 10.6  | 11.2  | 7.5   | 4.8  |
| San Benedetto Ullano  | 780     | 3.7      | 5.3 | 4.7   | 13.2  | 14.0  | 10.8  | 8.8   | 17.9  | 11.8  | 9.7  |
| San Cosmo Albanese    | 4,413   | 4.6      | 4.8 | 5.9   | 15.9  | 14.5  | 11.7  | 10.4  | 13.5  | 9.8   | 9.0  |
| San Demetrio Corone   | 1,116   | 3.0      | 3.3 | 5.8   | 16.9  | 14.1  | 8.8   | 13.9  | 13.7  | 10.3  | 10.1 |
| San Martino di Finita | 1,317   | 6.5      | 5.9 | 5.6   | 16.1  | 16.4  | 9.9   | 9.3   | 14.0  | 9.0   | 7.1  |
| Santa Sofia d'Epiro   | 3,095   | 5.6      | 5.9 | 6.7   | 18.8  | 15.4  | 10.6  | 9.7   | 11.7  | 9.3   | 6.3  |
| Vaccarizzo Albanese   | 1,425   | 4.5      | 4.8 | 5.2   | 16.9  | 13.3  | 11.8  | 10.6  | 14.7  | 10.6  | 7.6  |
| コセンツァ県                | 750,896 | 6.2      | 6.6 | 7.4   | 17.3  | 15.6  | 13.0  | 10.2  | 10.7  | 7.7   | 5.3  |

ツァ県（歴史的には Calabria Citra）で確認されるかぎりその創設がもっとも古く、またギリシャ・ビザンツ典礼の神学校（セミナーリオ）が開設され、これは1732年から1794年までは、サン・ベネデット・ウラーノに移されていた（Tavolaro, 1935）。コセンツァ県での神学校は、あとギリシャ・ビザンツ典礼のサンタ・マリア・オディジトリア修道院があったサン・バジレだけであり、ギリシャ・ビザンツ典礼の神学校がグロッタフェッラータに一本化される19世紀末まで、サン・デメトリオとサン・ベネデット・ウラーノは、それぞれシラ・グレカおよびティレニア海側海岸山脈東斜面のアルバニア集落の文化的中心であったのみでなく、政治的、経済的にも重要な意味をもっていたのであった。これら二つの集落の政治的、社会的地位の下落と対象をなすのが、イタリア統一後のルングロの地位の上昇である。ルングロは二つの点でシチリアにおけるピアナ・デイ・アルバネージと共通した性格をもっている。まずリソルジメントの運動のなかで、具体的にはガリバルディ軍の侵攻にさいして、多数の同調者あるいは「ナショナリスト」を輩出したということであって、ドメニコ・マウロの率いるアルバニア人ガリバルディ軍（garibaldini albanesi）への参加者がルングロの場合とくに多かった<sup>14)</sup>。イタリア王国のもとでサン・デメトリオにかわってアルバニア文化の中心という地位を獲得してゆき、1919年にはギリシャ・ビザンツ

典礼の司教座がもうけられ、コセンツァ県北部のみでなく、ポテンツァ、ペスカーラ諸県の散在するすべてのアルバニア集落がルングロ司教区に属することになった (Meyriat, 1960 pp.242-249 この部分の執筆者は E.Cassin) が、これはパレルモ県の5つのアルバニア集落がピアーナ・デイ・アルバネージ司教区に属するのに対比されよう。イタリアの工業化とともに、工業原料としての岩塩の需要が高まり、ルングロの岩塩坑 (Salina) は盛時には700人を雇用していたので、これがルングロ経済にとって重要な意味をもっていたことはまちがいない。岩塩坑が閉鎖されるのとほとんど同時期に、175病床の州立総合病院が誘致され、これが現在のルングロ経済にもたらす波及効果は大きい。

サン・デメトリオについては新旧の2万5千分の1図があるので40年間における住宅地の発展および農業改革の結果、新しい自作農が散居を展開した様子を図3にみることができる。ルングロについては新しい2万5千分の1図が1996年時点で未完なので1958年の修正図を図4に示すが、現在では住宅地が国道に沿ってずっと南方、サン・レオナルド地区にまで発展している。もともと自作農が卓越していたルングロでは、周辺農地のなかへの散居の展開はあまりみられない。

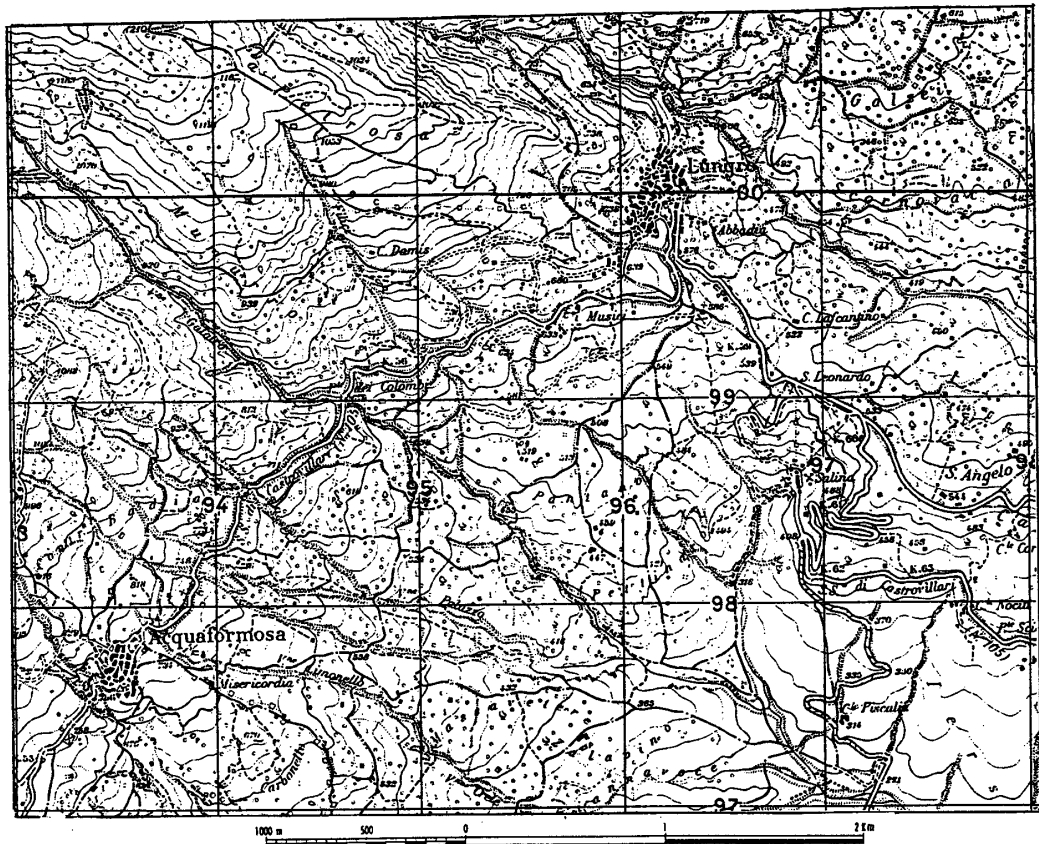


図4 ルングロとアックアフォルモーサ

1943年の航空写真をもとに作製されたもので、1949年に地形修正、1958年に集落、道路の修正がなされた I. G. M. の2万5千分の1地形図からのコピーである。この部分の2万5千分の1、5万分の1地形図で最新のものは、1996年9月時点ではこれしかなかった。

表2 労働人口の構成 (1991年10月人口センサスのISTATのデータによる)

(上段は実数, 下段は, 就業人口, 失業人口, 若年失業人口については労働人口に対する百分率, 産業別人口については就業人口に対する百分率)

|                       | 労働人口<br>総数 | 就業人口              | 失業人口*1           | 最初の職を<br>求めている人口<br>(若年失業人口) | 農業               | 工業              | 建設業              | サービス業*2          |
|-----------------------|------------|-------------------|------------------|------------------------------|------------------|-----------------|------------------|------------------|
| Acquaformosa          | 639        | 445<br>(69.6)     | 79<br>(12.4)     | 115<br>(18.0)                | 260<br>(40.7)    | 31<br>(4.9)     | 62<br>(9.7)      | 107<br>(16.7)    |
| Castroregio           | 237        | 161<br>(68.0)     | 22<br>(9.3)      | 54<br>(22.8)                 | 84<br>(35.4)     | 14<br>(5.9)     | 16<br>(6.8)      | 19<br>(8.6)      |
| Civita                | 499        | 378<br>(75.8)     | 36<br>(7.2)      | 85<br>(17.0)                 | 161<br>(32.3)    | 44<br>(8.8)     | 60<br>(12.2)     | 43<br>(8.6)      |
| Falconara Albanese    | 538        | 284<br>(52.8)     | 116<br>(21.6)    | 138<br>(25.7)                | 39<br>(7.2)      | 29<br>(5.4)     | 162<br>(30.1)    | 82<br>(15.2)     |
| Lungro                | 1,261      | 861<br>(68.3)     | 53<br>(4.2)      | 347<br>(27.5)                | 161<br>(12.8)    | 109<br>(8.6)    | 74<br>(5.9)      | 134<br>(10.6)    |
| Plataci               | 496        | 294<br>(59.3)     | 49<br>(9.9)      | 153<br>(30.8)                | 178<br>(35.9)    | 17<br>(3.4)     | 42<br>(8.5)      | 58<br>(11.7)     |
| San Basile            | 533        | 399<br>(74.9)     | 61<br>(11.4)     | 73<br>(13.7)                 | 124<br>(23.3)    | 60<br>(11.3)    | 97<br>(18.2)     | 64<br>(12.0)     |
| San Benedetto Ullano  | 677        | 381<br>(56.3)     | 142<br>(21.0)    | 154<br>(22.7)                | 136<br>(20.1)    | 55<br>(8.1)     | 117<br>(17.3)    | 111<br>(16.4)    |
| San Cosmo Albanese    | 296        | 212<br>(71.6)     | 21<br>(7.1)      | 63<br>(21.3)                 | 121<br>(40.9)    | 5<br>(1.7)      | 19<br>(6.4)      | 33<br>(11.1)     |
| San Demetrio Corone   | 1,852      | 1,239<br>(66.9)   | 218<br>(11.8)    | 395<br>(21.3)                | 499<br>(26.9)    | 86<br>(4.6)     | 202<br>(10.9)    | 253<br>(13.7)    |
| San Martino di Finita | 436        | 262<br>(60.1)     | 55<br>(12.6)     | 119<br>(27.3)                | 2<br>(0.5)       | 33<br>(7.6)     | 112<br>(25.7)    | 58<br>(13.3)     |
| Santa Sofia d'Epiro   | 1,088      | 611<br>(56.2)     | 183<br>(16.8)    | 294<br>(27.0)                | 130<br>(11.9)    | 82<br>(7.5)     | 192<br>(17.6)    | 188<br>(17.3)    |
| Vaccarizzo Albanese   | 587        | 456<br>(77.7)     | 36<br>(6.1)      | 95<br>(16.2)                 | 218<br>(37.1)    | 44<br>(7.5)     | 21<br>(3.6)      | 80<br>(13.6)     |
| コセンツァ県                | 295,966    | 193,735<br>(65.5) | 33,922<br>(11.5) | 68,309<br>(23.1)             | 36,402<br>(12.3) | 20,803<br>(7.0) | 39,185<br>(13.0) | 48,193<br>(16.3) |

\*1ここでいう「失業人口」とは、一度職に就いたのち失業した人たちのことで、「最初の職を求めている人口」を含まない。「最初の職を求めている人口」の一部は、職がないので大学などに通学しているが、実質的にはこれも失業人口である。

\*2商業、運輸・通信業を含む。

表2に示した調査集落ごとの労働人口の構成は、表1および表3<sup>15)</sup>との関連で考察されなければならない。失業率は経済的状況の善し悪しを必ずしも反映するものではなく、生産年齢層の比重が小さい集落では失業率も小さくなる傾向がある。また労働人口構成は主たる収入源によって分類されるので、極端な場合のサン・マルティーノ・フィニータでは、農業を職業とする有業人口は2人だけであるが、比較的少ないとはいえこの村にはかなり

表3 土地利用状態 (1990年10月農業センサスのISTATのデータによる)

|                       | 総面積 (ha)   | 播種地 (%) | 放牧地 (%) | 樹木栽培地 (%) | 森林 (%) | その他 (%) |
|-----------------------|------------|---------|---------|-----------|--------|---------|
| Acquaformosa          | 2,033.14   | 18.0    | 12.0    | 20.6      | 37.4   | 12.0    |
| Castroregio           | 1,693.66   | 42.0    | 32.4    | 6.5       | 13.8   | 5.4     |
| Civita                | 2,848.05   | 18.0    | 64.1    | 10.5      | 1.7    | 5.6     |
| Falconara Albanese    | 914.79     | 18.9    | 27.6    | 2.3       | 43.8   | 7.4     |
| Lungro                | 2,947.97   | 17.4    | 13.8    | 21.2      | 36.7   | 10.9    |
| Plataci               | 2,097.85   | 31.7    | 18.0    | 16.0      | 23.4   | 10.9    |
| San Basile            | 1,618.46   | 16.3    | 11.5    | 19.7      | 29.6   | 23.0    |
| San Benedetto Ullano  | 1,456.70   | 18.8    | 14.3    | 9.6       | 50.5   | 6.8     |
| San Cosmo Albanese    | 1,281.66   | 25.7    | 5.6     | 58.5      | 7.2    | 3.0     |
| San Demetrio Corone   | 5,398.34   | 29.7    | 5.3     | 36.7      | 20.0   | 8.3     |
| San Martino di Finita | 1,459.41   | 31.3    | 15.4    | 24.5      | 26.9   | 1.9     |
| Santa Sofia d'Epiro   | 3,401.18   | 48.2    | 8.5     | 22.0      | 8.0    | 13.2    |
| Vaccarizzo Albanese   | 1,184.37   | 15.9    | 1.2     | 72.8      | 6.4    | 3.8     |
| コセンツァ県                | 523,108.56 | 22.9    | 15.2    | 15.2      | 40.7   | 7.5     |

の農地がある。農業経営体の規定は複雑であるが、1 ha以下の経営規模でも大部分が農業経営体とみなされるのであり事実、農業センサスではこのコムーネに227の農業経営体が記録されている。このうち85%が経営規模5 ha未満で、大部分が家族労働のみにたよっていることが記録されているので、ここにおける農業は日本式に分類すればほとんどが第2種兼業農家によっていとなまれていることがわかる。表2の農業人口率は兼業機会の多寡にかなりよっているのであって、農地面積が相対的に小さいファルコナーラ・アルバネーゼではコセンツァへの通勤のほか、道路建設を主にする建設業従事者<sup>16)</sup>の比重が高い。

コセンツァ県のアルバニア集落では、集約的農業として灌漑農業はあまりなく、重要なのは葡萄、オリーブなどの樹木栽培である。集約的農業の導入のためにはテラスの造営などの土地改良事業を必要とするが、1950年にはじまる農業改革<sup>17)</sup>によって、土地改良のためにカラブリア農業改革公団が介入した地域の方が、伝統的に自作農が卓越していた地域、あるいは前世紀に寄生地主層が没落してしまっていた地域<sup>18)</sup>よりも現在では豊かな集約的農業が展開されている地域になっている。18世紀初頭までは、教会、修道院所有の土地が多かったが、18世紀中葉以降、村内での階層分化が進み、大土地所有制が展開したのであった<sup>19)</sup>。このことを典型的に示しているのがヴァカリッツォ・アルバネーゼで、サン・コスモ・アルバネーゼ、サン・デメトリオ・コローナなどでも葡萄栽培地がこの40年間に飛躍

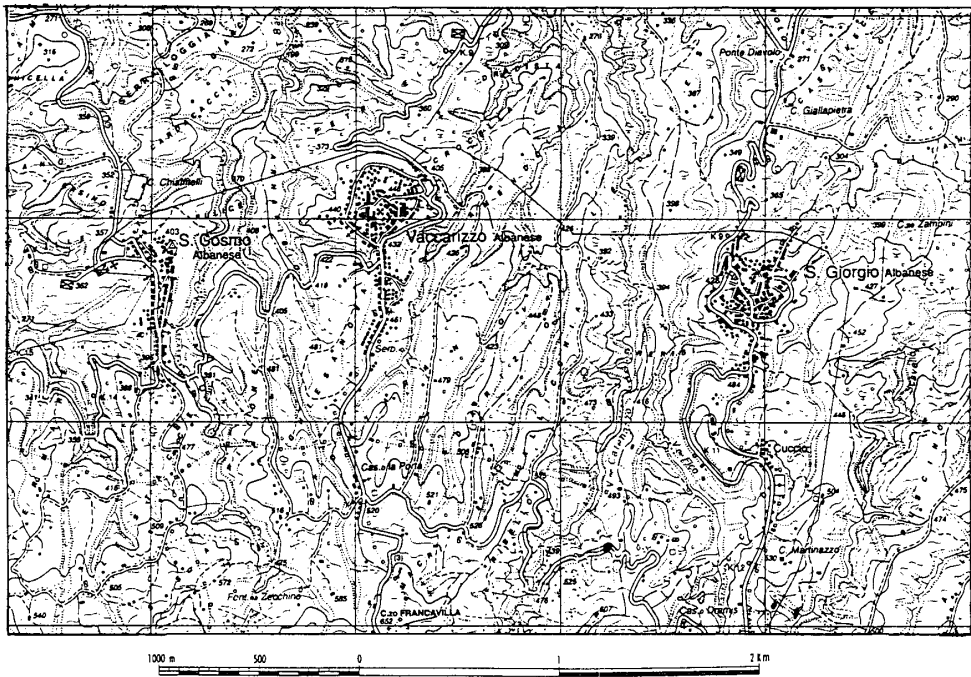


図5 サン・コスモ、ヴァッカリッツォおよびサン・ジョルジョ・アルバネーゼ  
1994年版の I. G. M. の 2万5千分の1地形図（4色刷り）からのコピーである。伝統的な集落は岳上集落であるが、1950年代以降、新しい自作農が農地の中に敷居状に居住を展開したほか、国道沿いに住宅地が拡大したことがわかる。

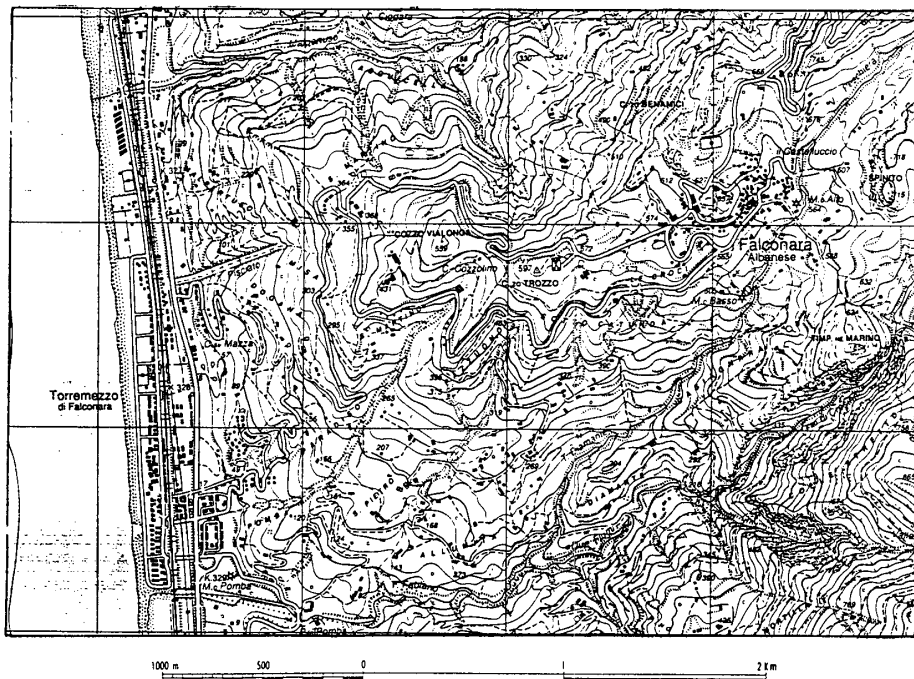


図6 ファルコナーラ・アルバネーゼ  
1994年版の I. G. M. の 2万5千分の1地形図（4色刷り）からのコピーである。伝統的な中心集落は岳上集落であるが、すでに前世紀末から、ティレニア海側の高度200mから400mの比較的ゆるやかな斜面に耕地がひろがり、多くの農家が散在していた。また海岸に、最近20年間にトルレメッツォ・ファルコナーラが発展したが、大部分はセカンド・ハウスで、賑わうのは夏だけで常住人口は220人ほどにすぎない。

的に増大した。サンタ・ソフィア・デピーロはアルバニア集落のなかでは灌漑耕地が例外的に多く、これもカラブリア農業改革公団の40年間の事業によるものである。灌漑耕地の場合、1年生作物の栽培地である播種地の比重が高いが、播種地の比重が高くてカストロレジョの場合には、いわゆる農民的ラティフンディウムが、農業改革公団の介入もないうまま継続している事例である。実質的には統計上の播種地の大部分が耕作の放棄された土地である。

#### IV. 現代における arbëreshë

アルバニア系イタリア人が arbëreshë の自覚を持ちはじめたのは18世紀末であり、当時、バルカン半島においてはアルバニアなる国家が存在しなかったのは勿論、古代 Ilirija 人の末裔あるいは shqip の土地 Arberia という観念も存在していなかった。arbëreshë あるいは arbëreshë という意識は、リソルジメントの運動のなかで、すなわち理念としての国民国家イタリアを前提にして実体化したのであった。アルバニア系イタリア人は、固有の文化を背負いつつも、マッツィーニ主義者あるいはサヴォイ王党派と共通の政治的あるいは文化的願望と展望を持ちえたのであった (Gambarara, 1981)。リソルジメントにおいてのみでなく、しばしばアルバニア系イタリア人内部での意見の対立をはらみつつ、19世紀後半の全政治過程、とくに南部問題 (Marco, 1988; Galasso, 1990) から、1910年代以降のイタリアのバルカンへの介入、ユーゴスラヴィアにおけるコソヴォ問題、そして1990年代におけるアルバニア難民の受け入れ<sup>20)</sup>問題にいたるまでに、大多数の、アルバニア語に関しては文盲の arbëreshë 大衆を背景にして、その指導者、知識人は、ギリシャ・ビザンツ典礼のバジリオ会修道士 (basiliano) によって伝えられた書かれた言語 (Mandalà, 1995) を武器にして、18世紀末から19世紀前半にかけて、近代ヨーロッパの合理精神を封建体制 (したがってナポリのブルボン王国およびオスマン帝国) の蒙昧主義に対置したのであった (Elmo, 1992)。文学作品をアルバニア語で書き、政治論、経済論をイタリア語で書いたジローラモ・デ・ラーダ (1814-1903) のナショナリズムはきわめて理念的、神秘的なものであって、決してトルコやスラヴ勢力に抗してのアルバニア独立運動を鼓舞するような性格のものではなく (Marco, 1994)、彼の念頭にあったのは立憲国家イタリアの発展であり、イタリア南部問題の解決を農業の発展を通じてはかることであった (Marco, 1996)。しかし、バルカン各地のアルバニア人、そして地中海各地のディアスポラ・アルバニア人にとって重要なのは、19世紀末から、アルバニア語による出版が禁止されているなかで、バルカン各地での地下出版を通じてアルバニア語正字法を確立するのに、アルバ

ニア系イタリア人の神学校で伝えられていたアルバニア語の書き言葉が重要な役割を果たしたということである。世界のアルバニア学研究において *arbrëshë* 文化研究が重要な一つの大きな理由がここにある (Altimari, 1993; Breu, 1991)。

第二次世界大戦後、とくに1970年代以降、多くのアルバニア集落でアルバニア語の教育、伝統文化の保存が熱心になされるようになり (Famiglietti, 1982)、いくつかの大学にアルバニア語・アルバニア文学講座が新設または拡大され、イタリアはドイツとならんで世界のアルバニア学を中心になっている。これは過去において、リソルジメントにはじまり、イタリア・ナショナリズムの高揚期に、決して対抗文化としてのではなく、下位文化としての *arbëreshë* なるものの諸要素を、体制支持のための象徴化<sup>21)</sup>、中央集権的王政であれ、ファシストのポピュリズムであれ、そこに象徴的に収斂させるための手段として動員したのとは様相をまったく異にしている。

先進工業化諸国とくに西ヨーロッパ諸国のエスニック・マイノリティーは、文化体験のグローバルゼーションに加えて、ヨーロッパ統合の進展にともなう国家という規制枠の弱体化、多文化主義の主張の興隆という新しい状況のもとで、彼らの経済的、社会的主張をはじめたのであり、アルバニア系イタリア人の新しい主張は、かなりの部分がそのようなコンテキストのなかでとらえなおされなければならない。しかし多くのエスニック・マイノリティーとちがって、たとえ彼らが、勿論文化的意味においてのみであるが、「アルバニア人」であるとしても、セルビア共和国におけるコソヴォのアルバニア人とちがって、「アルバニア系イタリア人」は、現代イタリアにおいては、いかなる意味においても差別されている集団ではない。別の観点からすれば、マジョリティーとしてのイタリア人は「アルバニア系イタリア人」にとって他者ではなく、*arbëreshë* に対して、イタリア人がヘゲモニー集団として、ジャクソンたちのいう「差別化の政策 (politics of difference)」(Jackson and Penrose, 1993) を行使することはない<sup>22)</sup>。この点では、*arbëreshë* は、すでに前世紀からいわば先取りされた多文化主義的状况のもとでマイノリティーとしての形成をおこなってきたことになる。

統合ヨーロッパの実質的な一員にイタリアがなるのに *arbëreshë* がどのような役割を果たすか、南部開発政策の退潮期にあつて、彼らが南部の再生にどのような役割を果たすか、そして冷戦構造が崩壊し、バルカン半島におけるいわゆる「民族問題」がますます複雑化し泥沼化の様相を深くしているなかで、アルバニア系イタリア人が、大部分がイスラム教徒であるバルカン半島のアルバニア人との関係をどのような形で発展させていくかということが、イタリア人としての *arbëreshë* の将来にとって重要な意味をもつのである。

## 謝辞

現地調査にご協力くださった多数の方に、いちいちお名前をあげないが心からお礼を申し上げます。資料の提供、閲覧、現地での案内等、多大の便宜をはかってくださったレングのカラーブリア大学の Francesco Alrimari 教授、ルングロの Costantino Marco 氏、サン・マルティーノ・フィニータの Ernesto Tocci 氏、ヴァッカリッツォの Vincenzo Borrescio 神父（お名前をイタリア語で書かせていただく）にはとくに謝意を表したい。また資料の入手、整理には平成8年度駒澤大学特別研究助成を利用させていただいた。本稿はその成果の一部である。

## 注

- 1) 彼らの大部分がアルバニア語を母語にしていたであろうことは間違いないが、来住時に彼らがギリシャ正教徒であったか、それともギリシャ・ビザンツ典礼のカトリック教徒であったかは、前稿の(注4)で指摘したように、未解決の問題である。また、イスケンデル・ベイ（スカンデルベルグ）の軍隊にイタリア系の言語を母語とする兵士がいたり、バルカン半島の沿岸部にラテン系の言語の集落があったであろうことは当時の状況から推測できるので、移住したアルバニア人がすべてアルバニア語を話していたということを確言することはできない。
- 2) 当時の行政区画によるもので、クロトーネ県、ヴィボ・ヴァレンティア県が新設される前のものである。
- 3) これらについての詳しい文献は Marco(1996, p.3; p.224) にあげられているが、私はまだ直接これらの文献を検討できないでいる。
- 4) 詳細な文献目録は Vaccaro (1994), Γιοχαλαλασ (1996) に掲げられている。またファルコナーラ・アルパネーゼの民俗についての雑誌 *La Calabria* の記事 (Altimari e De Rosa, 1995), Tocci(1865) のように、近年、多くのものが復刻印刷されている。南イタリアにおけるアルバニア人の来住の歴史を検討した先駆的文献としては以下のものがあるが私は未見である。  
 Dorsa, V.(1847): *Su gli Albanesi. Ricerca e pensieri.* Dalla tipografia TRANI, Napoli.  
 Morelli, T.(1842): *Cenni storici sulla venuta degli Albanesi nel Regno delle Due Sicilie.* Dallo Stabilimento del Guttemberg, Napoli.  
 Tajani, F.(1886): *Le istorie albanesi.* Tipi dei Fratelli Jovane, Salerno. (Cosenza, Casa del libro G.Brenner, 1969)
- 5) 市町村別の外国語人口の調査がなされたのは1921年人口センサスまでで、以後センサスではこのデータは得られない。
- 6) ギリシャ・ビザンツ典礼の住民が大多数であっても、農業労働者、公務員や郵便局員としてラテン典礼の住民がいない場合はない。しかし、ラテン典礼の住民のための教会がなく礼拝堂だけがある場合や、ヴァッカリッツォ・アルパネーゼのサンタ・マリア・ディ・コスタンティーノ双子教会のように、ラテン典礼の部分は実質的に機能しなくなっている場合もある。
- 7) コムーネ当局者は自分たちがアルバニア集落であると承知していたが、住民はアルバニア語をまったく知らず、教会もラテン典礼である。
- 8) Bisignano 侯爵領は Crati 川左岸山地にもひろがっていて、後述するように、ここに1480年前後さらに多くのアルバニア人が来住した。南イタリアにおける15世紀におけるアルバニア人の定着は、このようなローカルな領主や修道院・教会のイニシアティブだけによるのではなく、当時アンジュー家に対してようやく覇権を獲得したナポリのアラゴン王朝のフェルディナンド一世の入植政策によるところが大きかった。とくにカラーブリアでは、ペストの流行と地方権力の反抗による戦乱のために、クラティ川流域をふくむ多くの地帯が無人の不毛な地となっていて農牧業の振興が大きな課題になっていたのである。プーリアのタラントの後背地にある一連のアルバニア集落 (l'Albania Salentina と総称される) もクラティ川右岸のアルバニア集落と同時期または数年先行して、ナポリ王朝のイニシアティブのもとに創設されたと考えられている。



- 9) 中世の Lungrium は良質の岩塩の産地として有名であったが、岩塩坑 (Salina) は現在の集落の南方の谷にあった (図4参照)。現在の Firmo とむすぶ尾根づたいの国道は19世紀末の建設になるものであり、伝統的な交通路はこの谷沿いの東西方向のものであり、この谷に沿って古い礼拝堂などが多く残っていることから、中世の Lungrium の位置は現在の Lungro とは異なっていたことが十分に考えられるが、これは今後の中世考古学および歴史学研究の課題である。岩塩の採掘は1970年代まで続けられていた。Castrum Sancti Salvatoris の場合、そのような砦が存在したことはたしかであり、その遺構は現在確認できるが、どの程度の集落が存在していたかはまったくわからない (Marco, 1991, pp.88-91)。
- 10) Pietro Pompilio Rotoda は、Roma (1763): *Dell'origine, progresso e stato presente del Rito Greco in Italia*, 3巻(1986年, Brenner, Cosenza より復刻)を著し、教皇庁に arbrëshë がギリシャ・ビザンツ典礼をとることを認めさせたのであるが、マルコは現代イタリア社会におけるサブカルチャーとしての arbrëshë を主張する立場から、アルバニア系イタリア人のアイデンティティーの根拠として宗教的要素を強調することは、アルバニア系イタリア人が本来もっていた寛容性、イタリア文化との相互浸透性を損なう危険があると警告している (Marco, 1996, pp.227-229)。
- 11) registro ecclesiastico, いわば宗門人別帳であるが、私の中部イタリアおよび南イタリアにおける調査体験からいえば、18世紀までの人口に関しては、通常各司教座に保存されている教区司祭によるこの記録が、正確度においても、経年的変化をみるためのデータの基準の一貫性という点でも、もっとも役にたつ史料である。
- 12) しいて交通の要所に位置している事例を求めればフラシネートであるが、この場合、数キロ西にカストロヴィッラーリという中世からの重要な中心地があるのであるから、交通の要所に軍事的目的からアルバニア人傭兵を入植させたとは考えにくい。
- 13) comunità montana のことで、1971年12月3日の山地開発のための法律1102号によるものである (De Vecchis, 1992, pp.177-185)。イタリアにおける山村開発については竹内 (1983) で詳しく考察したが、この論文ではこの comunità montana を「山地コムーネ組合」と訳した。プラータチとカストロレジョの相違は、表1および表2の統計データが示す以上に実際には大きく、プラータチでは、まがいものかも知れないが多くに民家が「伝統的スタイル」で修復され、広場にも「伝統的」タイルがはられていてともかく活気がある。プラータチがある程度まで観光開発に成功したのは、コムーネの指導層に意欲的人材をえたことに大きくよっていることは勿論であるが、プラータチの領域の一部が都合よくポッリーノ国立公園にはいり、一部が不動産開発の規制を受けない国立公園外にあることにもよっている。カストロレジョは国立公園外である。
- 14) ルングロから500人がガリバルディ軍に参加したと伝えられているが、これは誇張された数字であろう。ルングロにかぎらず、シチリアにおけると同様に、アルバニア集落からは他の南部集落からよりもガリバルディ軍に参加した者の比重が大きかった。イタリア王国とアルバニア系イタリア人との関係を分析するためには、しかしながら、その後のガリバルディ軍の解散、匪賊活動 (brigantaggio) の時期を経て、アルバニア系イタリア人の指導階層がいかにしてイタリア王国の体制に組み込まれていったかをみなければならない (Marco, 1988, pp.23-27 がこのような分析視角を提示している)。
- 15) 農業センサスも人口センサスも属人統計であって、その点での食い違いはない。
- 16) 1991年のセンサスが行われていた頃、高速自動車道コセンツァ北インターチェンジからティレニア海岸のパオラにいたる高速道規格のスパストラダの建設工事がなされていた。
- 17) イタリアの土地改革は、寄生的大土地所有制が多くみられる地域のみを対象にした一連の法律によって、粗放な土地利用の土地 (裸の播種地 seminativo nudo) のみを各地域の農業改革公団 (ente di riforma agraria) が地主から農地を強制的に買収し、自作農を創設するという部分的なものであった。それが、単なる土地改革ではなく農業改革と呼ばれた所以は、粗放な土地利用のまま直接耕作者に農地を払い下げるのではなく、各地域の農業改革公団が払い下げ前あるいは払い下げ後に、灌漑施設の建設や樹木栽培のためのテラスの造営などの土地改良をおこなって、土地所有関係の変更のみでなく、農業生産力構造の改革を意図していたからであった。カラブリアではシラ山地を主にした地域がその対象になり、カラブリア農業改革公団は、現在では用いられていない灌漑施設の建設などかなりの浪費もしたが、大きな半官僚組織を保持しながら、現在にいたるまで土地改良事業を続けている。コセンツァ県のアル

パニア集落に関して改革の対象になったのは、シラ・グレカのアルバニア集落である。

- 18) 前世紀にすでに寄生的かつ不在の大土地所有者がいわば土地を「売逃げ」した土地は、イタリアでは農民的ラティフンディウム (latifondo contadino)、スペインでは minifundo と呼ばれている。「農民的ラティフンディウム」、すなわち直訳すれば「農民的な大土地所有」とは矛盾した表現であるが、ここで latifondo とは、大土地所有であるが故に不在化し、農業に由来する剰余を農業生産力の発展のために投資しなかったという意味で寄生的な土地所有に由来する粗放な、2年に1度冬小麦を栽培するだけの粗放な土地利用形態を意味して用いられていると理解すれば、そのような粗放な土地利用のまま農民的土地所有に移行した最劣等地として、この表現は、minifundo と同様、それなりの妥当性をもつことになる。
- 19) サン・デメトリオ・コロネについては、1743年の土地台帳の分析がなされている (Parise Martirano, 1992, pp.16-18)。土地所有者そのものは200年間を通じてかなり交代し、多くの古い土地所有階層が新興土地ブルジョワジーにとってかわられることがあったが、大土地所有制が解体したのは1950年にはじまる農業改革によってである。
- 20) コセンツァ県でアルバニア難民を組織的に多数受け入れたアルバニア集落は、フラシネート、ルングロ、サンタ・ソフィア・デピーロ、ヴァッカツリツォ、アックアフォルモーサであった。
- 21) ここで文化地理学のキー・タームとして象徴化という用語を用いるのは、Shields (1991) によっている。
- 22) この点では、1990年代の新しいアルバニアからの移民、すなわち shquiptarë はまったく異なった状況のもとにある。

## 引用および参考文献

- 竹内啓一(1983): イタリアにおける山村問題。山村研究年報, 第4巻, pp.2-13.
- 竹内啓一(1996): イタリアにおけるアルバニア集落とアルバニア系イタリア人——パレルモ県における事例——。一橋論叢, 第116巻, pp.597-620.
- Γιοχαλασ, Π. Γ. (1996): Αλβανο-ιταλικά. Ξεματική Βιβλιογραφία. Κεντρο Σποψδων Νοτιοαματολικησ Εψρωπηθ, Αθηνα, 222 π.
- AA.VV.(1985): *Le minoranze etniche e linguistiche. Atti del I Congresso internazionale 1985*. Palermo.
- AA.VV.(1989): *Le minoranze etniche e linguistiche. Atti del II Congresso internazionale: Piana degli Albanesi, 7-11 settembre 1988*. 2 voll. Palermo.
- Altimari, F.(1983): Comportamento linguistico e condizionamenti socio-culturali nella situazione plurilingue di un'area albanofona della Calabria, in Guzzetta, A.(1983), pp.51-74.
- Altimari, F.(1993): L'Albanologia oggi: Risultati e Prospettive di Richrca. *Quaderni del Dipartimento di Linguistica*, vol.7, pp.13-22.
- Altimari, F., Bolognari, M. e Carrozza, P.(1986): *L'esilio della parola: la minoranza linguistica albanese in Italia*. Pisa.
- Altmari, F., De Rosa, F.(1995): *Testi folclorici di Falconara Albanese, pubblicati nella rivista "La Calabria" (1888-1902)*. Di Adia, Rendeo, 356p.
- Bellinello, P.F.(1991): *Minoranze etniche nel Sud*. Editoriale Bios, Cosenza, 111p.
- Bellinello, P.F.(1996): *Minoranze etniche e linguistiche nel Nord Italia*. Editorial Bios, Cosenza, 114p.
- Beloch, K.J.(1937): *Bevölkerungsgeschichte Italiens*. Bd. 1, Walter de Gruyer, Berlin, 284S.
- Breu, W.(1991): Zur aktuellen Situation in der nördlicheren italoalbanischen Kolonien. Breu, W. Ködderitzsch, R und Jürgen Sasse, H. (Herausgegeben) *Akten des Kongresses "Stand und Aufgaben der Albanologie heute" 3-5 Oktober 1988 Univ. zu Köln*. Kommission bei Otto Harrassowitz, Wiesbaden, S.1-16.

- Buccola, O. (1909): *La colonia greco-albanese di Mezzogiorno. Origine, vicende e progresso*. Palermo. Centro Internazionale di Studi Albanesi presso l'Università di Palermo (1969): *V Convegno internazionale di studi albanesi, V mbledhje ndërkombëtare studimesh shqiptare*, XI 1968. Palermo, 303p.
- De Leo, P. (1981): Condizioni economico-sociali degli albanesi in Calabria fra XV e XVI secolo. *Miscellanea di Studi storici, Università degli studi della Calabria*. Brenner, Cosenza, pp.123-142.
- Demetrio, K. (1988): *Alberia: Storia, cultura, folklore*. Castrovillari.
- De Vecchis, G. (1992): *La montagna italiana. Verso nuove dinamiche territoriali: i valori del passato e le prospettive di recupero e di sviluppo*. Edizioni Kappa, Roma, 273p.
- Dillon, H. (1948): *La badia greca di S. Adriano*. Società Mattia Peti, Reggio di Calabria.
- Elmo, V. (1992): *Le idee dell'illuminismo nel pensiero degli Italo-albanesi alla fine del XVIII secolo*. C. Marco Editore, Lungro di Cosenza, 131p.
- Famiglietti, M. (1982): Situazione e prospettive dell'insegnamento dell'albanese. *Laboratorio Educazione Permanente. Realtà e prospettive della cultura arbëreshë*. anno III no.3-4, 93p.
- Gabrieli, G. (1924): Gli italo-greci e le loro colonie. Notizie storico-linguistiche e bibliografiche sulle colonie italo-bizantine tuttora esistenti nel Mezzogiorno d'Italia. *Studi Bizantini*. Seconda serie, Politica, Storia-Economia V, pp.97-105.
- Galasso, G. (1990): Gli Italo-albanesi e la questione meridionale. *L'altra Europa*, n.7, pp.14-26.
- Gambarara, D. (1981): Etnicità, comunicazione, organizzazione. *Zjarri*, XIII, n.27. pp.49-67.
- Gambi, L. (1965): *Calabria*. Torino, UTET, 564p.
- Giordano, E. (1957): *Folklore albanese in Italia. Usi e festeggiamento tradizionale nell'occasione della Pasqua in Frascineto ed Ejanima (Cosenza)*. Cassano Ionico.
- Guzzetta, A. (a cura di) (1985): *Etnia albanese e minoranze linguistiche in Italia. Atti del IX Congresso (1981)*. Palermo.
- Jackson, P. and J. Penrose (1993): Conclusion: Identity and the Politics of Difference. In P. Jackson & J. Penrose (eds.): *Constructions of Race, Place and Nation*. UCL Press, London, pp.202-209.
- Kanter, H. (1930): Kalabrien. *Abhandlungen aus der Gebiet der Auslandskunde*. Bd.33, Reihe C; Naturwissenschaftler. Bol.10, Hamburg, 378 S.
- Kellner, H. (1972): *Die albanische Minderheit in Sizilien*. Wiesbaden, 133 S.
- Korolevskij, C. (1931): Le vicende ecclesiastiche dei paesi italo-albanesi della Basilicata e della Calabria. *Il Plataci Archivio Storico per la Calabria e la Lucania*. IV, pp.207-217.
- Mandalà, M. (1995): Introduzione. *Il codice chieutino di Nicolò Figlia*. Comune di Mezzoiuso. pp. XVII-XCVIII.
- Marco, C. (1988): *La questione arbëreshë. Tentativo di definizione. Per lo svecchiamento della cultura e un approccio meridionalistico alla problematica della minoranza italo-albanese di Calabria*. Edizioni Brenner, Lungro di Cosenza, 58p.
- Marco, C. (1991): *L'Arberia come un'infanzia*. C. Marco Editore, Cosenza, 153p.
- Marco, C. (1994): Il mito nazionale nella letteratura albanese da De Rada a Kadarë. *Europa Orientalis*, vol.13, no.2, pp.7-24.
- Marco, C. (1996): *Gli arbëreshë e la storia civiltà, lingua e costumi*. C. Marco Editore, Lungro, 306p.
- Marinelli, O. (1913): Il numero degli Albanesi in Italia. *Rivista Geografica Italiana*, vol.20, pp.364-367.
- Meyriat, J. (1960): *La Calabre, Une région sous-développée de l'Europe méditerranéenne*. Armand Colin, Paris, 329p.
- Morè, E. (1950): La funzione rivoluzionaria della Calabria nel Risorgimento. *Il Ponte*, Anno VI, pp.1047-1058.
- Parise Martirano, M. C. (1992): *Le minoranze etniche della Provincia di Cosenza*. Eugenio Santelli Editore, Cosenza, 59p.
- Pitto, F. e Tocci, G. (1914): Gli Albanesi in Calabria. *Archivio Storico della Calabria* II, pp.237-253; pp.465-475; 534-544.
- Pitto, P. (1989): L'identificazione culturale della tradizione della diaspora fra gli arbëreshë in em-

- igrazione. *Le minoranze etniche e linguistiche: Atti del II Congresso internazionale: Piana degli Albanesi, 7-11 settembre 1988*. Palermo, II pp.667-688.
- Regione Puglia, Assessorato P.I., Centro Servizi Culturali Distretto 54 Grottaglie (1988): *II Convegno di lingua e cultura albanese*. 26-27 giugno, 1986. Grottaglie, 78p.
- Regione Puglia, C.R.S.E.C.(1989): *Le minoranze etniche e linguistiche: una questione storica, una sfida per la democrazia*. Atti del III Convegno nazionale dei comuni albanofoni -24/26 giugno 1988- S.Marzano di S.G. Regione Puglia -Assessorato P.I. e Cultura- C.R.S.E.C. Grottaglie.
- Rohlf, G.(1990): *Dizionario toponomastico e onomastico della Calabria*. Longo Editore, Ravenna, 429p.
- Rother, K.(1966): Die Albaner in Südtalien. *Mitteilungen der Österreichischen Geographischen Gesellschaft*. 110-1 1968 S.1- 20.
- Russo, L.(1975): *Albanesi d'Italia*. Sao Paolo, Palermo. 173p.
- Satriani, L.(1979): Ruolo e prospettive delle minoranze etniche e linguistiche. *Quaderni Calabresi*, no.45, pp.68-79.
- Savorgnan, F.(1939): Le colonie albanesi in Italia. *Nuova Antologia* Anno 74, pp.313-316.
- Shields, R.(1991): *Places on the Margin. Alternative geographies of modernity*. Routledge, London & New York, 334p.
- Takeuchi, K.(1995): Some Problems Regarding Ethnic Minorities in Italy: A Preliminary Survey of Foreign Labourers in Southern Italy. *Mediterranean World*, no.14, pp.121-136.
- Tavolaro, E.(1935): *S.Benedetto Ullano e gli Albanesi d'Italia*. Grottaferrata, 63p.
- Tavolaro, E.(1969): *Origini e sviluppo delle comunità albanesi in Calabria*. Scat, Cosenza, 39p.
- Tocci, G.(1990): *Memoria dei comuni albanesi di S.Giorgio, Vaccarizzo, S.Cosmo*. Guido Editore (Ristampa eseguita presso la litografia F.A.R.A.P., 1990), 204p.
- Touring Club Italiano (1980): *Basilicata e Calabria. Guida d'Italia del Touring Club Italiano*. Quarta edizione, Milano, T.C.I., 714p.
- Vaccaro, A.(1994): *Italo-albanensia: Repertorio bibliografico sulla storia religiosa, sociale, economica e culturale degli Arbëreshë dal sec. XVI ai nostri giorni*. Editoriale Bios, Cosenza, 314p.
- Zangari, D.(1941): Le colonie italo-albanesi di Calabria. *Storia e demografia*, secoli XV-XIX. Napoli, 162p.

## **Albanian Settlements and the Italo-Albanian in Southern Italy (II): A Case Study in the Province of Cosenza**

**Keiichi TAKEUCHI**

This paper constitutes the second part of the author's study on the so-called Albanian settlements in Southern Italy, the previous one being a case study in the province of Palermo. More than half of the Albanian settlements in Southern Italy are distributed in the province of Cosenza; the author first examines the distribution of Albanian settlements in this province in relation with the settlement history of the fifteenth and sixteenth centuries and the marginal physical conditions of the settlement

sites. The author has conducted field surveys in thirteen Albanian settlements and the larger part of the paper is dedicated to considerations of the cultural and socio-economic situations of these settlements. The Italo-Albanians are generally considered an ethnic minority in Italy, but their character and their social and cultural situation and their sense of identity differ somewhat from those of other ethnic minorities; they are not discriminated against in any way, and they acquired their sense of identity at the end of the eighteenth century, much before the rise of Albanian nationalism in the Balkan peninsula. For them, the Italian or *lëtinj* are not the “other”; their sense of an Italo-Albanian identity was especially strong when Italian nationalism was more emphatic, such as the period of Risorgimento. The bases of their ethnic identity are rather complicated; in many Albanian settlements, they use the Albanian dialect in daily life, while in some of their villages the Albanian dialect has been lost for several decades though the villagers still remain Catholics who continue to maintain Greco-Byzantine rites. In yet other villages, they celebrate Latin rites, maintaining the Albanian dialect. In big cities such as Palermo and Rome we can find certain Italo-Albanians who hold onto their Italo-Albanian identity following Latin rites and without speaking the Albanian dialect.

Because of the hilly and mountainous locations of Albanian settlements in the province of Cosenza, actual economic conditions are generally marginal with a high rate of unemployment and a high proportion of elderly people.